
サンドイッチ！ ～シンジはアスカに3度恋をする～

朝陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンドイッチ！ ～シンジはアスカに3度恋をする～

【Nコード】

N9922K

【作者名】

朝陽

【あらすじ】

小学3年の春、初めてアスカと出会ったシンジは、その後出合いと別れを繰り返し返す。3度目の再会でシンジはアスカに対する自分の思いを固めることになる。様々な性格のアスカを描こうとした作品です。

こちらの作品は2009年に他の投稿サイトに投稿していたのですが、諸事情により投稿サイトの管理人様に事情を話してこちらで掲載させて頂く事になりました。

ファースト・インパクト！　　幼き日の太陽

僕は碓シンジ、10歳。どこにでもいる小学校3年生だ。
今日、母さんと、父さんの仕事の都合で、第三新東京市に引っ越してきたんだ。

僕は一学期から第壱小学校に転校することになっていた。

「碓シンジです。趣味は特にありません」

お父さんは僕のしつけに厳しくて、僕はいつもいい子でいるようにさせられた。

自分でも面白くない、真面目っぽい子だと思う。

自己紹介はとても簡潔だった。

クラスの間みなも無反応に思えた。

転校初日にこんなつまない僕に声をかけて来るクラスメートも居なかった。

これからクラスの間みなと仲良くやっていけるのかな……。

僕は友達と楽しそうにしているみんなを羨ましく思いながら、寂しく一人で教室を出た。

家へ帰る道で下の方を向きながら歩いていると、目の前を歩いていた、赤いランドセルを背負った女の子が突然振り返って、

「さようなら！」

と、僕に向かってとつても明るい笑顔で言ったんだ。

驚いて何も言い返せないでいるうちに、その子は遠くまで走って行

ってしまった。

僕はその子の事を覚えていなかった。

クラスの子とも話した覚えもないんだもの。

でも、僕は「さようなら」と言われた時の事がとても嬉しくてたまらなかった。

僕は嬉しくて、帰ったらお母さんにそのことを話したら、

「よかったわね」

と言って頭をなでてくれた。

次の日、僕が学校に行くと、その子は僕のクラスメートだということが分かった。

名前はアスカちゃん。

僕は声を掛ける勇気が出なくて、自分の席で、楽しそうに友達と話している彼女をながめることしかできなかった。

せめて、彼女と近くの席になれたらなあ……。

今日は、前よりはクラスの子と話す機会は増えたけど、一緒に帰れるような友達は出来なかった。

でも、昨日よりみんなとの距離が縮まった気がするんだ。

そして授業が終わって、僕が家に帰る時間がやってきた。

僕は昨日と同じように一人だ。

だけど、昨日とは違ってそれは僕が望んだことだ。

今日はわざとアスカちゃんの後ろになるようにタイミングを図って教室を出た。

僕のノミのような心臓が高鳴っているのを感じる。

今歩いている道は僕の家からの通学路の中でもとても狭い道。自転車何かとても通れないような、大人の人一人が苦勞してなんとか通れるぐらいの細い道。

いよいよ、僕とアスカちゃんの帰り道が分かれる所までやって来た。僕は緊張で吐き気を感じてしまっただけだけど、勇気を振り絞って、声を出した。

「さ、さようなら！」

するとアスカちゃんは振り返って、ほんの少しの間その青い目を丸くしていたけど、すぐに笑顔になって、

「うん、さようなら！」

と答えてくれたんだ。

嬉しさと恥ずかしさで僕の顔はとても赤くなっていたんだと自分でもわかった。

その次の日から、僕にも同じクラスで友達ができた。

サッカーに誘ってくれたトウジと、その友達のケンスケだ。

トウジはクラス委員長のヒカリちゃんと知り合いで、ヒカリちゃんはアスカちゃんと友達だったから、僕は自然に友達としてアスカちゃんと話ができるようになっていた。

でも、アスカちゃんと話すときは顔が赤くなってしまうけどね。転校した初日に、なんでアスカちゃんは僕にさようならって言ってくれたのか気にはなっただけど、聞けなかった。

……わざわざ聞くことじゃないしね。

ただ、困ったことに、僕のどこがいいのか、レイちゃんという女の子が親しげに声をかけて来るようになった。

掃除の時も、僕の後ろについて回るし、果てには僕の家に来てやってくるようになって、クラスのみんなに冷やかされるようになった。アスカちゃんは、どう思ってるんだろう。

僕はアスカちゃんにレイちゃんと恋人同士だと誤解されていないように祈るだけだった。

僕の母さんとアスカちゃんの母さんのキョウコさんは、同じ学者と言う職業で、引っ越してから同じ職場になった事もあってか、親しくなっていた。

母さんとキョウコさんと僕とアスカちゃんの四人で遊園地に行ったりもした。

……これって親公認のデート、ってことかな。

僕はドキドキしているんだけど、アスカちゃんはいつものように元気に乗り物に乗ってはしゃぎ声を上げている。

アスカちゃんは僕の事をただの友達だと思っているのかな……。

そして学校での席替えの時。

担任のミサト先生が、

「側に座りたい人の名前を紙に書いて先生に渡してね」そうすれ

ば隣に座らせてあげるわよ」

と言った時、僕はチャンスだと思った。

書けば先生に思い切り好きな人の名前がばれてしまう……。

でも……、僕はやっぱりアスカちゃんの隣の席に座りたい！

僕は思い切って紙に『惣流アスカ』と書いて震える指で先生に渡したんだ。

……そして僕はアスカちゃんと隣の席になることができた。きつとミサト先生にはからかわれることになるんだろうな。

でも、ミサト先生、ありがとうございます！

僕はとっても幸せです！

教壇に座ってるミサト先生も、僕の事を温かい目で見守ってくれている気がする。

でも、授業中アスカちゃんが隣の席に居るだけで舞い上がってしまったっている僕は、勉強どころじゃ無かった。

特に、僕が教科書を忘れてしまって、アスカちゃんに見せてもらっている時は、ドキドキしちゃって教科書なんか全然見てなかった。

国語の授業中にミサト先生に指されても、

「すみません、続きをどこから読んでいいのか聞いてませんでした」

と謝らなくてはいけなかった。

算数のテストも30点と最悪の結果だった。

「シンジ君、アスカちゃんにホの字なのはわかるけど、頑張っ

てね

僕はミサト先生にそう声をかけられて、真っ赤になってしまった。

その頃の僕は学校が楽しくてたまらなかった。

日曜日なんて来なくてもいい！

だって、学校ならアスカちゃんの側に居られるから。
やっぱり恥ずかしくて、アスカちゃんを遊びに誘うなんて出来なかつたから。

ヒカリちゃんが居てくれる時はいいんだけどね。

そしてやってきた遠足の日。

クラスの男子と女子は列になって整列する。

「それじゃあ、男の子と女の子はペアになって手を繋いでね」

ミサト先生がそう言うのと、ちらほらとクラスの子が手を繋ぎ始める。僕は素早くアスカちゃんに近づいて手を差し出すと、アスカちゃんは何のためらいもなく僕の手を握ってくれた。
は、恥ずかしいけど、嬉しい。

あ、アスカちゃんも僕の事を好きだと思ってくれているのかな。
僕は期待してしまった。

……でも、それはやっぱり違ったみたいだ。

「惣流ってさ、昔から男子とも平気で遊ぶよな」

ケンスケがぼつりともらした言葉を聞いて、僕はショックを受けた。
そうだったんだ。

そういう子だったんだ。

アスカちゃんにとって僕はただの仲のいい友達だったんだよね。
いいんだ、それでも僕は明るいアスカちゃんが好きなんだから。

……でも、楽しい日々はそう長くは続かなかった。

アスカちゃんの父さんの仕事の都合で、二期期の終わりにアスカちゃんが転校することになってしまったんだ。

僕はクラスのお別れ会で泣きながらアスカちゃんと握手をするだけしかできなかった。

アスカちゃんにきちんと好きだって伝える事も出来なかったし、アスカちゃんが僕をどう思っているのか聞くこともできなかった。

……アスカちゃんが引越していく日。

最後のお別れをしようと僕はアスカちゃんと待ち合わせた公園に母さんと一緒に向かったけど、来たのはキョウコさん一人だった。

アスカちゃんは風邪がひどくなって来られないという。

……やっぱり僕の片思いだったんだ。

さようなら、僕の初恋。

すぐに転校先のアスカちゃんから葉書が来た。

「私は元気です。シンジ君は元気ですか、さようなら」

とても短い文面。

僕は返事を出さなかった。

母さんには怒られたけど。

それきり葉書は来なくなった。

アスカが転校してから、僕はトウジとケンスケ、レイとヒカリさんと平凡だけど楽しい学校生活を送っていた。

特に僕はレイとカップルにみられることも多くなっていた。

そして仲良く地元の市立第壱中学校に進学。

アスカは寂しい僕の心を照らしてくれた優しい太陽のような明るい女の子。

……僕の方が一方的にアスカの事が好きだっただけ。

僕はそう思い込む事にしただけ、それは大きな間違いだった。

それは4年後、僕が14歳の時、アスカがこの街に還って来た時に身を持って思い知ることになったんだ……。

包丁を握りしめた彼女の姿を思い出すと、今でも身震いがする。

セカンド・インパクト！　く傷つき合う恋

僕は碇シンジ、14歳。

どこにでもいる中学2年生だ。

4年前、母さんと、父さんの仕事の都合で、第三新東京市に引っ越してきたんだ。

小学校から一緒の幼馴染の綾波レイも、同じクラスに居る。

「シンちゃん、起きてよ。早く学校行かないと遅刻しちゃうよ」

レイとは小学3年生の時に会って以来、腐れ縁みたいなもので、クラスも小学5年の時に一度だけ別になっただけ。

毎日寝坊助の僕を起こしに来てくれるし、授業中以外はお弁当の時もいつも側に居る。

今日もレイと夫婦同伴だって冷やかされながら、二人で楽しくおしゃべりしながら教室を出た。

「レイ、カバンを返してよ」

「じゃあ、シンちゃんが私を捕まえたら返してあげる！」

放課後、いつものように校門の前で二人で遊んでいると、レイが何かに気づいたように動きを止めた。

「今、紅い髪の毛の女の子が職員室に入って行ったよ」

「紅い髪の毛の子って珍しいね。外人さんかな？　そんな子、この学校に居たっけ？」

「私も知らないよ。きっと転校生なんだろうね！」

次の日、僕が学校に行くと、転校生の子は同じ学年の他のクラスに転入したということが分かった。

名前は聞いてないけど、かなり美人でスタイルが良くて、成績優秀、スポーツ万能で、明るくて、クラスの人気者になっているらしい。

まあ、僕には関係の無い話だよなあ……。

今日も、僕は転校生の事には興味を持たずに、教室でレイやトウジたちといつもの日々を過ごしていた。

そして、転校生が来て一週間ほど過ぎたころ、母さんが夕食の時に言いづらそうに話を切り出したんだ……。

「シンジ、家にアスカちゃんが遊びに来ないけど、学校で会ったりしていないの？」

僕は母さんに言われて初めてアスカの事を思い出した。

あんな大好きだった子の事をすっかりと忘れていたなんて！

「アスカちゃんの家族はね、お父さんの転勤で四年程地方に会社に居たけど、一週間前にまたこちらに戻って来たのよ」

「じゃあ、転校生の紅い髪の女の子って、アスカの事だったんだ……」

……

アスカはどんな子になっているんだろう。

まだ会ったことの無い、別れた時から四年後のアスカを想像すると僕はなかなか眠れなかった。

僕は学校に早く行きたいという気持ちを抑えきれずにレイが起こしに来る前に着替えを終わって居た。

レイは早起きをした僕の姿に信じられないといった様子で目を丸くしていた。

「転校生がアスカだったなんて、驚いたよ。今日、みんなでアスカに会いに行こうよ！」

レイは振り返って、ほんの少しの間その赤い目を丸くしていたけど、すぐに笑顔になって、

「うん、そうだねー。ヒカリも喜ぶと思うよ」

と答えてくれたんだ。

僕はまた前のようにアスカを交えて楽しく過ごせる。

バカみたいにそんな事を信じていたんだ。

僕たちは放課後を待って、アスカが転校したクラスへ行った。

僕たちは教室の中で赤髪碧眼の女の子……アスカを見つけた。

よかった、まだ帰っていなかったみたいだ。

アスカは元々かわいいと思っていたけど、ぐっと美人になっていた。背もかなり伸びていて僕より高くなっていた。

僕と目が合うと、ちょっと目を反らした気がしたけど、すぐにパツと笑顔になった。

「あら、シンジとレイ、ヒカリにトウジにケンスケ、久しぶりね」

4年ぶりの再会を果たした僕たちは、小学校のころに戻ったようにかなり遅くまで残って話し込んだ。

トウジたちと別れた僕はアスカと二人で僕の家に戻ることにした。

母さんもアスカを連れて来いって言っていたしね。

でも、いつも付いて来るはずのレイがついて来なかった。

そして、僕は二人きりになった途端にアスカに足を踏みつけられた。

「痛い！ 何するんだよ、アスカ」

「よくもアタシの手紙を無視してくれたわね、バカシンジ！」

「無視？」

「あきれた！ 忘れてたの？」

アスカは痛がる僕の腕を強引に引つ張って、僕の家に入って行った。玄関に入ると、母さんは嬉しそうにアスカに笑顔を向けた。

「あら、お久しぶりね、アスカちゃん。まあ、すっかり綺麗になっちゃって」

「おばさまあ、そんなこと無いです」

どつしえー、凄い変わり身。

アスカは母さんの前ではすっかり猫を被っておしとやかになっていた。

そのままアスカは母さんと玄関でしばらく楽しそうに話をしている。

「それでは、おばさま、さようなら」

そう言ってアスカは帰り際にまた僕の足を思いっきり踏んづけて帰って行った。

そして次の日の放課後。

「あら、バカシンジ。こんな所でレイとイチャついていたらカップルに思われるよ」

僕とレイが校門の前でいつものように遊んでいると、アスカが声を掛けて来た。

「もう、ずっと前から思われているみたいだし、別に気にしてないよ」

僕は小学校の頃からレイと一緒にだし、落ち着いて素直な気持ちを答えた。

すると、アスカは僕の反応が気に入らなかったのか、怒った顔になった。

「邪魔して悪うござんしたね！ あかんべえ！」

そう言つてアスカは駆けて行つてしまった。

「あかんべ……」

その後、僕はレイと遊び続けたけど、なんだか気分が晴れなかった。レイも明るく振る舞っていたけど、気分が沈み込んでしまったみたいだ。

次の日も、その次の日も、アスカは何かにつけて僕やレイたちによっかいを出してきた。

アスカを中心に明るくなれると思っていたのに、逆に僕たちの関係はギクシャクし始めたんだ。

困り果てた僕は家に帰って母さんについて心の内をもらしてしまつた。

「学校でいつもアス力は何か不機嫌な感じで僕とレイに突っかかって来るんだ。僕は何かアス力の気に障る事をしてるのかな？」

それに答えた母さんの言葉は僕にショックを与えた。

「アス力ちゃんの家はね、ご両親が離婚する予定らしいのよ」

「えっ？」

「アス力ちゃんのお父さんがね、お母さんのキョウコさんに暴力を振るうようになったらしいの。地方に転勤してすぐらしいわ。きつと仕事で悩んでしまったのね」

……アス力にそんなことがあったなんて。

「そんなことがあったから……シンジに出した葉書が戻って来なくてさらに悲しい気持ちになったんじゃないのかしら？」

だから今のアス力とはげとげしい感じなんだ。

前みたいに明るい笑顔が出来ないんでいるんだ。

次の日は日曜日で学校が休みだったから、僕は4年ぶりにアス力の家に遊びに行った。

キョウコさんは穏やかな笑顔で僕を迎えてくれた。

会ったのは4年ぶりのはずなのに、白髪も増えて10歳ぐらい歳をとっているように見えた。

僕はアス力の部屋に足を踏み入れて、そつとドアを閉めた。

アス力はベッドに腰掛けて黙って僕の方をにらみ付けるように見ていた。

「アスカ、もうちょっと無理しないで肩の力を抜いたほうがいいよ」
「何よ！ アタシに指図するっていうの？」

「素直に泣いてもいいんだよ、ずっと我慢していたんだろう？」

「バカシンジのくせに何でそんなことわかるのよ！ ……ずっと隠してきたのに。おばさまのせいね？」

「アスカ……僕は……」

「そうよ、でもアタシはアンタに安っぽい同情なんかで側に居ても
らいたくないのよ！」

アスカは話しているうちに目から涙をあふれさせていた。
ほっぺたにも滝のような筋が流れている。

「違うよ！僕はその……アスカを誤解していたんだ！アスカは
性格もかわいいと思うし……」

目が真っ赤に腫れあがっていても、鼻水をグズグズすすっていても
やっぱりアスカはともかわいい顔をしていたから、僕は照れてし
まって、その後の言葉が続けられなかった。

アスカはそんな僕を涙に濡れた目で見つめていた。

「ねえ、シンジ。キスしようか」

「えっ？」

ポツリとアスカが呟いた言葉に、僕はとても驚いてしまった。

「こ、これはただの儀式よ、儀式。中学生になってキスの一つもし
たこと無いって恥ずかしいでしょう？」

「で、でも……」

「もしかして、レイとすでにやっちゃったの？」

「そ、そんなことしてないよ」

僕のその言葉にアス力はとても満足そうな笑顔を浮かべて、僕の顔をつかんで強引に唇が互いに接触するように押し付けた。運よくお互いの歯が衝突することは避けられたみたいだ。

……ファーストキスの味はしょっぱかった。

アス力はさっきまで大泣きしていたからだろうね。

「おはよう。バカシンジ、レイ」

「ああ、おはよう、アス力」

「おっはよー。アス力」

次の日から僕は朝起こしに来てくれるレイと、通学路の途中でアス力と待ち合わせをして三人で登校するようになったんだ。アス力は平然と人前で僕をバカシンジと呼び続けたけど、自然に明るく振る舞うようになった。

これで僕達も以前の関係に戻れたんだと、心の底から安心していた。……でも、その裏で表面上はいつもと明るいレイが実は悩み苦しんでいたなんて、僕はアス力が明るくなった事実には浮かれています。気付かなかったんだ。

いつものようにレイが部屋に入ってきて、僕を起こして学校に行く毎日が続くと思ったんだけど、その日の朝は違っていた。

レイはいつもと違って硬い真剣な表情で僕を見ている。

「……碇君。私の質問に正直に答えて」

僕は驚いた。レイが僕の事を碇君なんて呼ぶのは初めての事だし、こんな暗い落ち着いた声で話すのも聞いたことが無いからだ。

「碇君は、アスカの事が好きになってしまったのね？」

「うん、でも僕はレイの事も……今まで通り……」

するとレイは首を横に振った。

「碇君、私と居る時もアスカの方ばかり気にしている。起こしに来るのは今日で最後。明日からはアスカに起こしてもらうのね」

有無を言わせないようなとても冷たく冷やかな声だった。

レイも明るい笑顔の下にこんな素顔を抱えていたなんて。

僕は返事もできずに呆然としているだけだった。

「今度から、私の事は綾波って呼んで。さようなら、碇君」

レイは振り返りもしないで部屋を出て行ってしまった。

着替えを済ましてリビングに行くと、悲しそうな顔をした母さんが立っていた。

「……母さん。こうしてみんな、バラバラになって行くんだね。いつまでも一緒にいられないんだね」

「大人になるって、こういうことよ」

次の日から僕とアスカの新しい中学校生活が始まった。

毎朝アスカに起こしてもらい、授業中以外はアスカといつも一緒に居るような生活。

レイからアスカに乗り換えた不届き者ってトウジに言われてしまったけど、きつといつかみんなに認めてもらえる恋人同士になれる。

僕はそう思って、荷物持ちという名前のついた買い物デートにも暇

つぶしと言つ名目の遊園地デートにも喜んで出かけた。

……だけど、アスカに好かれたという気持ちが強くなりすぎたのか、僕はアスカに嫌われないように振る舞うようになってしまったんだ。

その日の夜は母さんも父さんも帰りが夜遅くになるらしいから、僕は一人で夕食を食べた後、テレビ番組を見ながら過ごしていた。玄関のチャイムが鳴る音が聞こえたので、出てみると、そこに居たのはレイだった。

「こんな時間にどうしたの？ レ……いや、綾波」

「碇君。最近のあなたはアスカに道具のように扱われている。本当にそれでいいの？」

「え？……でも僕は……アスカに言われた事は何でもしたいし……」

「ねえ、私、好きだったシンちゃんが、そんな風に振る舞っているのを見て居られないんだよ？」

レイはそう言つて僕の前で泣き出してしまった。

レイをこんなに泣かしてしまった事なんて初めてだ。

僕は為す術もなく立ち尽くしていた。

その時、玄関の方から誰かが入ってくる音が聞こえた。

母さんが帰って来たのかなと思つたら、なんとアスカだった。

「シンジ……。アンタまだレイに未練が残っているって言うの……！」

アスカは怒ったような低い声でそう言いながらリビングに入ってきた。

「ア、アスカ、別にそう言うわけじゃないんだってば！」

必死に訴える僕の声にアスカは耳を貸してはくれないみたいだ。台所にまで進んだアスカは戸棚から包丁を取り出して、手に握りしめてこう言っただ。

「アンタが全部アタシのモノにならないなら、アタシは何もいらない……！」

僕はアスカから自分に向けられた狂気に凍りついて。

レイもアスカの殺気に気押されたのか動くことは出来なかった。

アスカは肩で荒々しく息をしている。

この一触即発の対峙は、帰って来た僕の父さんと母さんがアスカを抑えつけたことで一応の解決を見せた。

騒ぎを聞きつけて駆けつけたキョウコさんは土下座して僕とレイに謝った。

……僕はこの一件でアスカの事がすっかり怖くなってしまった。

次の日から学校で僕はアスカを避けるようになった。

アスカの方も僕に顔を合わせづらいのか、お互いに会うことは無くなった。

でも、その代わり僕の携帯電話に無言電話がかかってくるようになった。

僕が出るとすぐに切れてしまう。

非通知電話番号からだけれどきつと犯人はアスカだ。

僕はアスカともっと距離的に離れたくなった。

アスカのあの言葉は中学生の僕には重すぎる言葉だったから。

進路相談の時、僕は父さんに思いもよらない話を勧められた。

外国の高校に留学してみてもどうかという話だった。

アスカから離れたかった僕は、渡りに船とばかりに必死に外国語を勉強することを父さんと約束して留学することを決めた。

高校生になった僕はアスカから逃げ出すために、外国へ飛び立った。いくらなんでも外国までは追って来れないだろう。

外国で暮らす苦労より、アスカから逃げだせた安心感の方が大きかったんだ、最初は。

でも、アスカは僕の事をあきらめてはくれなかったんだ……。

サード・インパクト！　　恋が愛に変わる時

僕は碇シンジ。

外国の留学中の高校生。

僕は小学校の時担任だったミサト先生の知り合いだと言う加持さんの所に住まわせてもらっている。

外国での高校生活は思っていたより大変で友達も作れずにいた僕は、すっかり五月病になってしまった。

そんな僕を見た加持さんに、夏休みに一時帰国する事を勧められた。

僕は外国に留学してから数カ月、ほとんど母さんや父さん達と連絡をする事が無かった。

母さんには毎日メールをしろって言われていたけど、そうすると弱音ばかり吐いてしまいそうだったから止めた。

たまにやり取りするメールでも、僕の外国での学校生活に関する話ばかりで、アスカの事は一言も話さなかった。

僕は避けていたし、母さんや父さん達も避けていたのかもしれないでも、僕が外国に行ってしまったんだから、アスカは諦めてしまっているだろう。

日本の空港では父さんが僕を出迎えてくれた。

父さんはいつもにも増して無口だった。

車を運転して居る時も何もしゃべらなかつた。

何か言いたそうにしているんだけど言えないみたいだった。

「シンジ……アスカ君の事なんだがな……」

家の前についてから、やつと父さんが喋った。

すると、僕の家玄関から、赤い髪の女の子が飛び出してくるのが見えた。

……もしかして、あれはアスカ!?

まだ僕を追いかけてくるの?

「おい、待てどこに行くシンジ!」

父さんの制止を振り切って僕は駆けだして行った。

そして見つからないように近くの公園の土管の中に隠れる。

「何でアスカが家に居るんだよ!」

何回この言葉を繰り返したんだろうか。

お腹がとても空いて意識がもうろうとして来た。

そういえば、機内食を食べてから何も食べていない。

でも、僕は家に戻る気にはなれなかった。

ずぶ濡れになった体が震えている。

そろそろ、限界なのかな……。

公園の土管の中で意識を失った……。

「……ここは、僕の部屋?」

気がつくと、僕はベッドに寝かされていた。

しかも、見慣れた日本の自分の部屋だった。

僕は懐かしく思ったけど、なんで助かったのか疑問に思った。

僕が起き上がってぼうつとしていると、部屋のドアが開いた。

母さんか、それとも父さんかな。

僕はそう思いながらドアの方に目を向けた。
部屋に入ってきたのはアスカだった。

「……あ、アスカ!？」

僕は思わず飛び起きてしまった。
体中から冷汗が出るのを感じる。

「……ごめんなさい、シンジ……そんなに怖がらないで……」

そう言われてアスカを見た僕は、あの時ほどの恐怖を感じる事は無かった。

久しぶりに見たアスカは……とても弱々しかった。

アスカはまるで病人のように生気がなかった。

くしをまったく通していないボサボサの枝毛だらけの髪。

人生を諦めてしまったような暗い瞳と目の下に刻まれた深いくま。

ひび割れてカサカサになってしまった紫色の唇。

ただ適当に着ているといった感じの皺になった服装。

漂ってくる不潔感を感じさせるような匂い。

「アスカ……!？ いったいどうしたの……?」

「ごめんなさい、シンジ……アタシ、シンジを苦しめてしまったの
ね……もう迷惑をかけないから……ただ一言会って謝りたかったの
……」

頭を下げてうなだれて謝るアスカを前に、僕はしばらく何も言えず
にいた。

「やっぱり、アタシは許してもらえないか。当然ね……」

僕が黙っていると、アスカは消え入るような声でつぶやいた。

「アタシ、もう二度とシンジの前に姿を現さないから……さよなら」

アスカはそう言って僕の部屋から出ようとする。

僕は嫌な予感がした。

ここでアスカを引き止めないと、アスカは思い余って何かしてしまいそうな気がする。

しかし、僕とアスカの距離は遠かった。

「……シンジが外国に言ってしまったから、アスカちゃんはずいぶん悩んでいたのよ」

タイミングを見計らったかのように母さんがアスカの前に立ち塞がって部屋に入ってきた。

「始めの頃は、シンジに会わせろって怒ったような感じで家に来ていたから、私達もシンジに会わせないようにしようと思っていたのよ。だから電話でもアスカちゃんのことと言わなかったの」

「……ごめんなさい、おばさま」

アスカはそう言ってうなだれた。

「でも、だんだんアスカちゃんも落ち込んだ感じになって……。おとなしく、家の前でお願いをするようになったから、少し前からアスカちゃんを家に入れてあげる事にしたのよ」

「だから父さん、ああだったんだ」

僕は父さんの煮え切れない態度の原因がわかった。
家にアスカが居るなんていったら、僕が帰れなかったと思うし。

「アスカちゃん、何事にも無気力で、キョウコも困っているのよ。
食事も最低限の量を食べるだけで残してばかりだし、女の子の身
だしなみは何一つしようとしないうし……」

僕は、元気だった頃のアスカの姿を思い浮かべると、今のアスカが
とても残念に思えた。

「アスカ、僕はもうアスカから逃げないよ」

僕はアスカの腕をつかんでそう言った。

アスカはつかまれた腕を振り払おうとする。
でもその力は弱い。

満足に食事をとっていないからなのかな。

「嘘、シンジはアタシの事が嫌なんでしょう。あんなことしたから」
「ううん、僕はアスカにまた会えて嬉しいよ。……この気持ちは本
当だから」

「なんで今更そんなこと、いうのよ……もうお別れしようと思った
のに、シンジと」

アスカはポロポロと涙を流し始めていた。

日本に帰ってきて初めて見たアスカの表情だった。

泣いているのに、僕には笑顔に見えた。

嬉しいのに泣いている。

僕は自分でも恥ずかしいかしいと思いつつも言わずにはいらなかった。

「アスカ、笑ってよ。せつかく帰って来たんだからアスカの笑顔を

見たいんだ」

アスカは黙って笑顔を見せてくれた。

アスカの笑顔はきれいとは言えなかったけど、僕はいい笑顔だと思った。

鼻水が垂れだす鼻。

ひび割れた唇。

ぼさぼさの髪。

腫れぼったい目とくま。

そんな欠点なんか気にならなかった。

僕は、母さんの見ている前だったけど、自分がアスカの事を好きだって精一杯訴えるためにアスカの唇に自分の唇を重ねた。

久しぶりに感じるアスカの唇はゴツゴツしてパサパサしていた。

ごめんね、アスカ。

原因は僕にもあるよね。

口を離すと、アスカはしばらく赤い顔でボーっとしていた。

「シンジにこんなみじめなアタシの姿見せちゃった。もっと綺麗な格好で会いたかったのに、恥ずかしい……」

アスカはそう言って僕に背を向けてしまった。

母さんはそんなアスカを見てとてもうれしそうだった。

「そうよ、女の子はまずは身だしなみからよ！ ゆっくりとお風呂で体を洗っていらっしやい、貸してあげるから」

「綺麗になって戻ってくるから、待っててね、シンジ！」

母さんにうながされてアスカは部屋を出て行った。

しばらくしてお風呂場からアスカの楽しそうな歌声が聞こえる。さっきまで病人のような態度を取っていたとはとても思えない。

アスカを送りだして、部屋に戻ってきた母さんは僕に真剣な顔を
して問いかける。

「シンジ。アスカちゃんをあんな風にしちゃって……もう一度付き
合うことになってもいいのね？」

「うん。僕はアスカがやっぱり好きなんだ」

僕のせいで夕食は遅い時間になったみたいだけど、夕食の席でもア
スカはとても明るかった。

「おばさま、ご飯のお代わり、いいですか？」

アスカは食事もおいしそうに食べていた。

人間の心ってここまで単純なのかな。

僕はおかしくて笑いそうになった。

僕の海外留学の話になって、外国の学校で親切にしてくれた女の子
の話をしてしまったんだけど、アスカはヤキモチを焼かずに聞いて
いた。

アスカは僕を独占したがるんじゃないで、信じて側に居てくれる、
そんな感じがした。

お互い落ち着いて大人になったと言っか……。

次の日の朝、アスカは悲しそうな顔で僕に語りかけて来た。

「シンジ、せっかく会えたのにまた外国に行っちゃうんだよね」

「うん。その事なんだけど……」

僕もアスカと離れたくない気持ちは一緒だった。

それに友達が居ない外国で上手く学校生活が送れるかどうか不安になり始めた頃だった。

元々そんなに外国の学校に行きたい思ってたわけじゃないし。

僕は日本でアスカと同じ高校に通うと言う選択をした。

外国の学校の方ではそんな不真面目な留学生は困ると言って怒られたみたいけど、父さんと母さんは僕の事を叱りはしなかった。

ただ、日本の高校は真面目に通うようにと注意はされたけどね。

アスカの進学した高校は僕たちの地元の生徒が通う人気の高校の一つだったみたいで、同じ学校に通うレイや洞木さん、トウジやケンスケはアスカの『変身』を見てとっても驚いたようだ。

新学期になって、今まで世捨て人のようだったアスカがサラサラの金髪をたなびかせて、すっかり血色が良くなった顔、活き活きとした瞳で、元気いっぱい朝のあいさつをしてくるのだから。

レイ達はアスカ変身の原因が何なのか非常に不思議がったけど、遅れてやってきた僕の姿を見て理由がわかったようだ。

アスカは胸を張って、

「アタシはシンジのおかげで綺麗になれたのよ」

とアスカは恥ずかしい事を言っただけ。

アスカのことを心配したレイや洞木さん、トウジやケンスケがいくらか説得してもアスカは無気力生活のままだったみたい。

アスカは遅れた高校生活を取り戻すかのようにパワフルだった。

僕とアスカは毎日相共にラブラブでのろけているみたい。

レイも全く入り込む余地が無いって、ちょっと悔しそうに言っていた。

もしこれからアスカと別れることがあっても、また僕はアスカを好きになれる自信がある。

僕がアス力を好きだって気持ちには【三度一致】したのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9922k/>

サンドイッチ！ ～シンジはアスカに3度恋をする～

2011年11月13日02時58分発行